



## ほほえみ 第22号

今年の夏は、お盆を過ぎてから、猛烈に暑くて大変でしたが、ほほえみ読者の皆様はいかがお過ごしでしょうか。ようやく、9月となり涼しくなってくるのかなあというこの頃です。夏バテされた方も、食欲の秋を迎えて、体力の回復に努めていただければと存じます。

### 新渡戸稲造精神

2012年9月1日は、新渡戸稲造生誕150年に当たります。節目の機会でもありますので、新渡戸稲造に関しての話題と致します。

新渡戸稲造には、多様な面がありました。教育者、農業学者、思想家、社会運動家、宗教家、文筆家といった側面です。10歳で親元を離れて、東京で英語を学び、15歳で札幌農学校に入学。当時の札幌農学校は、クラーク博士の流れを汲む英語漬けの学校でしたので、西欧の学問に対する理解は広く、深いものがありました。さらに、東京大学、アレゲニー大学、ジョンズ・ホプキンス大学、ベルリン大学、ハレ大学と類稀なる向学心をもって、学問の道を邁進しました。



しかし、新渡戸稲造の本質は洋才にはありませんでした。かといって、和魂にもなく、個人的には、キリスト教精神に裏付けられた愛や、自身を省みたり、実社会を体験したときの深い悲しみがあつたと思います。端的に言えば「悲のひと」でした。その上で、ただ悲しんでいる訳ではなく、武士道的な自制、鍛錬など内面の充実による、「品性の完成」を目指した人物と言えるでしょう。今日の日本では、愛、仁徳などは、言葉が独り歩きし、あたかも愛や仁がたやすいものに捉えられています。これは、孔子すら自らを「仁者」と許さなかったように、愛、仁徳が人道でありつつも困難な道であることと相容れません。日本の憂うべき現象の一つであると言えます。

話は少し変わって、安岡正篤の言う陰陽相俟の原理からすると、才は陽、徳は陰に相当し、人格には陰と陽、才と徳が必要であるということです。この陰陽相俟の原理は元々、司馬光が資治通鑑で唱えたものとのことです。司馬光の考えでは、大才があつても徳が才を上回らないと小人とされます。徳が才を上回れば君子ということですね。司馬光は、絶対的に君子を採って、小人を排し、小人よりもむしろ才無き愚人を採った人と言われています。

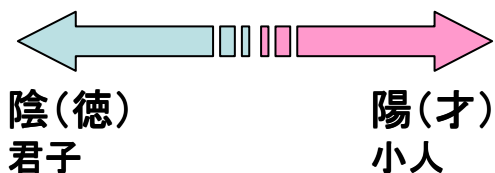
新渡戸稲造は、台湾の産業振興(製糖)のために招聘されたり、第一高等学校の校長に推されたり、国際連盟の事務局次長に抜擢されたりと、多方面に活躍します。その都度、新渡戸稲造は、これは引き受けても良いものかと悩むのですが、結局、見事に任を果たしています。新渡戸稲造には深い学識があり、最新の科学を適応する力があつたことは確かですが、成功の秘訣は、徳にあつたといえます。すなわち、君子は器ならずという言葉があるように、特定の才能を生かした訳ではなく、徳の力により成功へ導いたといえます。逆に、周囲が君子としての力を見抜いて、とっておきのポジションに抜擢した結果、様々な分野で活躍したように見えるというのが新渡戸稲造です。

先年の大震災の際には、日本の危機管理能力が問われました。最近の領土問題では、安全保障という国の根幹に関する危惧があるのはご承知の通りです。危機管理能力などは、マニュアルを作れば、危機管理センターを作れば良いというものではありません。

新渡戸稲造が居れば、この局面にどう対応したのか是非知りたところですが、恐らくその答えは、日本人に希薄化してきた、キリスト教という隣人愛や、東洋的な仁といった徳性の涵養にあり、君子を育てる教育が必要です。その上で、ここぞという場面では、小人を排して君子を採る社会の構築が求められているといえましょう。

### 陰陽相待的原理

#### 才と徳の二元論 (資治通鑑)



## 第10回日本臨床腫瘍学会学術集会へ参加して

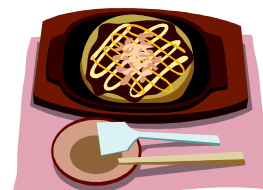
福田耕二

2012年7月26日～28日まで、大阪国際会議場で学術集会が開催されました。当科からは、「オキサリプラチン投与に関連したアレルギー反応と再投与に関する検討」という内容の発表を行いました。大腸がん治療の中心的役割を担うオキサリプラチンですが、しびれの症状やアレルギー反応が治療回数を重ねる毎に発生頻度が増加していきます。重篤な症状を回避しながら治療効果を維持できるようにスケジュールを調整することが求められています。

今回は当科が中心に関わっている消化器がん系の、本邦における新しい知見はあまりなかったため、乳癌や肺癌などのセッションを中心に見てきました。肺癌では2012年のアメリカ臨床腫瘍学会で明らかにされたペメトレキセドによる維持療法の話が多く、また特殊なEML4-ALK遺伝子を持つ肺がんに対するクリゾチニブについても盛況でした。

まだ残暑が厳しい状況ではありますが、当時の大阪は毎日が35℃を越え、夜になっても涼しくならないような状況でした。大都会・大阪を楽しむことなく、ほぼ学会会場と宿泊施設を往復するのみでしたが、電力不足と言われていた割には大きな混乱もなく、日本の電力供給能力に感心いたしました。

10月には、横浜で第50回日本癌治療学会学術集会が開催されます。当科からは加藤医師・伊藤医師が発表を行う予定です。



## 消化器内科医からみた、がん化学療法科

三浦真奈美

皆様、まだまだ残暑の厳しい日々が続いておりますがいかがお過ごしでしょうか？

ご挨拶が遅れまして大変失礼いたしました。私、7月8日とがん化学療法科で研修しておりました三浦真奈美と申します。岩手県二戸市の出身で伊藤祝栄先生とは高校時代に同じ公舎で学んだ1つ違いの先輩と後輩です。(とは言っても当時は全く認識していませんでしたが…)研修医の頃から中央病院に勤務して現在は消化器内科、内視鏡科で診療にあたっています。普段の仕事はというと、癌診療の分野においては、まずは癌を発見し正確に診断をつけること、胃カメラ、大腸カメラ、CT検査など複数の検査を組み合わせることで情報を集め治療につなげる橋渡しをするのが中心です。今回2ヶ月という期間をいただき、「診断」の次の段階である「治療」の一つ化学療法を勉強させていただきました。内科になると化学療法の適応かどうかは判断できても実際にどんな薬をどんなふう使用するのかなど基本的な内容すら疎くっており、本当に最初は緊張して久しぶりに机と本と向き合う日々でした。また、学問的内容とは別に、癌と向き合う患者さんと一緒にその患者さんにとって最良な治療を相談したり問題を解決したり関わりを深めていくことが大事なことだと認識させられました。まだまだ微力な内科医ですが、この2ヶ月で学んだことを生かして患者さんに還元できるように研鑽を重ねてまいります。

出来の悪い子の面倒を一からみてくださった加藤先生始め化学療法科スタッフの皆様にもこの場を借りて感謝申し上げます。消化器疾患の患者さんの中には院内でまたお会いする機会がある方もいるかと思えます。今後ともよろしく願い申し上げます。



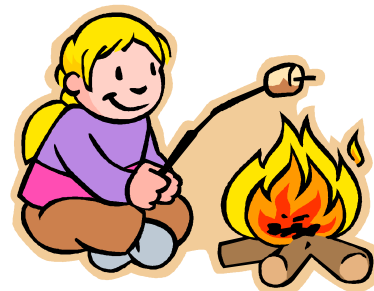
→ ニヶ月間、お疲れ様でした。異なる領域からの視点を、これからの診療に生かしていただければと思います(加藤)。

## MEMO

### 9月のがん化学療法科の予定

- |          |  |
|----------|--|
| 9月1日     | 岩手県立病院総合学会 市民公開講座<br>新渡戸稲造外来時代の到来 樋野興夫先生 |
| 9月14日    | 柴田教授外来                                   |
| 9月21日    | 新渡戸稲造記念 メディカル・カフェ                        |
| 9月22、23日 | がん哲学外来市民学会およびコーディネーター<br>養成講座(長野県、佐久市)   |
| 9月28日    | 柴田教授外来                                   |

9月～11月の間、福田医師の外来日が火、木となります。ご不便をお掛けしますが、宜しくお願い申し上げます。



掲載記事の無断転載を禁じます